

## 父の腕時計

峯田 泰彦

父が入居した「ホーム」は、「認知症対応型共同生活介護施設」だった。

ホームは東京の下町に在り、私は月に一度荒川の右岸をバスで通った。

父を外に連れ出し、昼食を共にするのが恒例になっていた。

或る年の初冬。

ホームに行くと、父はいつも通り食堂で皆とテレビの前に座り、ボロボロになった写真アルバムを無表情で眺めていた。

「父さん」と声を掛けると、驚いて「おー

と答えた。しかし、父は私を何処迄息子と認識していたかは分からなかった。どこまで

写真に写る自分の事は分かるが、他の人は問うても答えられず、私の名さえ口にしなかったからである。

父の部屋に行くと、三角に折り畳まれた大量の紙ナプキンが、机の上や抽斗、整理箆筥の中に溢れていた。

私は今ではそれを、「父が心の不安を、何かに夢中になる事で紛らわせていた行動」と理解する。

しかし、当時は認知症による単なる譫妄せんぼうとしか捉えていなかったのだ。

私が片付け始めると、施設の人は「構いませんよ」と言い、笑って黙認してくれた。

父に上着を着せ「行こうか？」と言うと、父の表情が和らいだ。

外に出られる事が嬉しかったのだと思う。

同居していた頃は、あれ程好きだった散歩が、ホームでは介護無しには自由に出来なかったのだろう。

バス通りの狭い歩道を抜け、脇の坂道を少し下ると商店街の細い路地に出る。

私は車道側に立ち、隻眼の父に肩を貸してゆつくりと歩いた。

見上げると、快晴の空が眩しかった。

商店街は、何処も同様で殆どシャツターが下り、駐車場やアパート、介護施設などに変わった貌しつ々あった。

店先の破れた儘の日除けや、字が消えかかった看板が哀れに見えた。

「閉店告知」の張り紙が風に揺れていた。

客で溢れた日々は、人が踏み締めた路地だけが知っているのだろう。

人と同様に街は老いるのかも知れない。

「ニコニコ商店街か！」

父は路地上の標識の字を読んで微笑んだ。洒落た街路灯が、往時の賑わいを偲ばせ、その一角に馴染の蕎麦屋が在った。

暖簾を潜り一番奥の席に着き、注文した。

「熱燗二本、お新香と板わさ、それとモヤシ炒めをお願い！」

これが私達の定番で、父の好物だった。

私は言葉数が減った父に、出来るだけ話し掛け喋らせる事にしていった。

「T（故郷）は、もう雪が降ったかねえ？」

「降ったかもなあ」と、父は答えた。

熱燗の酒を勧めると、父は注がれた酒を啜り、目を細めて微笑んだ。

本当に酒が好きなのだなと思う。

「Y（父の故郷）の人達は、元気かねえ？」

「うん……音沙汰が無いな」

「さあ、飲んで」

父は盃の酒を飲み、破顔して言った。

「美味しいねえ……」

つくづくいい顔だなと思った。

「S叔父さん（父の弟）は、元気かねえ？」

「どうだべえ、暫く会っていないなあ」

その後、私が知っているSさんの話題を続けるのと、父は「うん……そうか」と答えた。

酒は殆ど父に飲ませ、熱燗をもう一本頼むと父は喜んだ。

暫く飲んで語り、食べ続けた。

少しの間を経て父は盃を空け、「コトン」とテーブルに置くと、徐に言った。

「ところでよ。俺には三つ下のSと言う弟がいるんだが、あいつは元気なのかな？」

今迄散々Sさんの話をして来たのに、父は分かっていなかった。

私は可笑しくなりながらも、「元気そうだよ」と答えた。

締め蕎麦を食べ終え、父に食後の菓を飲ませて店を出た。

帰り道、床屋に寄り父の散髪を頼んだ。

此処も常連になっていた。

父は心地良さげに、ウトウトしながら調髪

を受けていた。

それから、父と肩を組んで再び路地を戻ると、父はすっかり上機嫌で言った。

「いやいや……こんなにボケるもんだべかあ」

「歳取ったら、皆同じだよ」

「俺も歳だな、バカになった。もう終りだ」  
「未だ未だ、これからだよ」

父と昼食を共に出来たのはホームに入つて二年程で、その後は認知症の進行と共に歩行が覚束なくなり、やがて散歩に付き合うだけとなった。

数年後の春。

父と散歩に出て、バス通りを歩くと、父は急にトイレに行きたいと言い出した。

急いで近くの珈琲店に入った。

白地に黒々と「コーヒー」と染め抜かれた暖簾が掛かる、とても古い店だった。

店主と二人掛りで、父を奥のトイレに連れ

て行き、用を済ませた。

そして父にオレンジジュースを飲ませた。その頃の父は、益々喋らなくなり、喋つても意味不明な事が多かった。

他に客はおらず、ラジオの音だけが静かに流れる中で、父がポツリと言った。

「婆さんは元気なのか？」

「Tさん（母）のことかい？」

「うん」

「もう、亡くなったよ」

「そうか……」

父は母の死を覚えていなかった。

そして父はグラスを私に向けて聞いた。

「これは、酒か？」

「ジュースだよ」

「そうか……」

父は再びストローを口に含んで言った。

「効くなあ……」

何時しか会話が途切れ、私はいたたまれなくなり、父を促して店を出た。

すると、父は店先でよろけて言った。

「今日の酒は効いたあ！」

父は、酒もジュースも分からなくなった。

父をホームに送り届けた後、私は気持ちが落ち込んだ。帰りは荒川の土手を歩き、時間をかけて気持ちを切り替えた。

遥かに遠い故郷の空を見詰めた。

悔しい様な、腹立たしい様な気分で歩き、

父をホームに入れた自分を責めた。

故郷で独り暮らしの父を呼び寄せて置き

ながら、五年で限界になった弱い自分。

壊れて行く父を見るのは辛く、故郷で共に

暮らした日々は遥か昔となってしまった。

父は過去に生きているのだろうか……。

寧ろ父は、過去や現在も超えた自分の時間の中で生きているのかも知れない。

父は、自分の変化に気付いていたと思う。

変わって行く自分を自覚したから、父は紙ナプキンを折り続け、写真アルバムがボロボ

口になる迄弄んでいたのだろう。

無意識の内に何かをせずにはいられなかったのだろう。そう思うと心が痛んだ。

やがて、父はそれもしくなくなった。

父はホームで七年余り暮らした。

東京の桜開花宣言が出た日に緊急入院し、四日目に九十一年の生涯を閉じた。

父の遺品を整理すると腕時計が出て来た。

それは以前、駅前の時計店で購入した父の愛用の時計で、十一時二十六分を指し竜頭が飛び出た儘止まっていた。

父は入浴時以外、常に身に着けていた。

ホームでは腕時計をする必要も無かつたろうが、若しかしたら父は最期の日まで止まった時計を着けていたのかも知れない。

そう思うと捨てられず、小さなガラス壘に入れて置いた。

父が去って一年後の夏。

私はガラス壘の腕時計を思い出し、購入した時計店に持ち込んだ。

「親父の形見なのですが、直りませんか？」すると店の人は奥に籠り、電池交換と調整をしてくれた。

二十分後、渡された腕時計は再び時を刻み始めた。私は時計に命が吹き込まれた様で嬉しくなり、手首に巻いた。

父と歩いた商店街の路地を一人で歩くと、懐かしい思い出だけが浮かぶ。

商店街はその後も変わり続け、「蕎麦屋」も「床屋」も「珈琲店」さえ、店主が高齢者ゆえ、遠からず消えて行くだろう。

過日、懐かしさの余り「蕎麦屋」に入り、父と此処に通った事を話すと、店主は何も覚えていなかった。

人は忘れても、父と歩いた路地だけは覚えていてくれるだろう。

私は父を通して「時」の冷酷さを感じ、人は各々に与えられた「時」を背負って生きね

ばならないと思った。

しかし、私は「時」に癒された様だ。

嘗て重い気持ちを引き摺って歩いた荒川の土手は、今では私の散歩コースとなった。

リタイア生活となった今、私は「古い」の意味を噛み締め、父の後を辿っている。

父の腕時計は、父の「時」を見届け、今は私の「時」を静かに見届けている。

(東京都足立区)